

各地から應援に馳せつける人も尠くなく岡山縣から來鳥した中川横太郎といふ人の應援演説などは聴衆が競つて詰め掛ける程であつて共弊社員の意氣益々熾んになると同時にその舉動がいよいよ露骨に亂暴を示すようになって來た演説會の内容が縣當局に無暗に當り散らすことを主眼とした結果縣當局に對する不滿不平民衆の要望などが追々系統化されるようになり隨つて因伯二州が島根

縣に合併されて居ることは因伯二州の福利民福を殺くものであると云ふ結論に自然に到達して來たのである。かくて明治十四年の去以降鳥取縣再置論が眞面目に幹部級の人達によつて考究され出す機運となり愛護派の擡頭と相前後して共弊社の機關紙たる山陰新報の發刊となり再置運動が共弊社員の間に具體化することゝなつた。(續く)

## 佛印への道

「道と兵隊」續篇 (一)

### 根井友信

武男君、

前便で一寸句はして置いた新作戦が慇々開始され、我々もそれに參加と決定、去る〇〇日 欽寧公路の雷屋村を出發して、此處 鶯籠公路の板利墟と云ふ所へやつて來た。

其の日は灼熱の太陽が照り附けて、やけに暑い日であつた。七月と謂へば内地でも酷暑の候である。まして此處南國では格別で

ある。待ちに待つた前進とて一同の意氣當るべからざるものであつたが數時間の後にはすつかり茹り上つてしまひ、それに自動貨車の上で壽司詰めの儘振り廻されたので、誰も彼もへとへとに參つてしまつた。跳ね上がる砂塵は全身を黄粉まみれにし、それが汗で捏ねられて眞黒になる。それこそ前向きか後向きか見分けられぬ程である。

十四時過ぎ、吳村墟を通過、此の舊龍公路へ始めて入つた時、急に道が良くなつたのでほつとした。ほつとすると共に僕は道の良いことが不審になり、乗り出して觀察し、始めた道路の幅員は八米程あつて、實に廣い。縦斷勾配は最急でも五パーセント以下位、曲線半径は部落附近で五十米程のを見かけたが、大部分は百米位ありさうだ。見透も良く、曲線部に片勾配も附いてゐる。相當進歩した規格に據つて構築されたものである。特に路面の非常に立派なのに感心する。

平々坦々として自動車に殆んど動搖がない程滑らかである。砂利粒が一つも散亂してゐない所から觀て、確かに鋪裝されてゐるものと思はれる。然しアスファルトでもなく、コンクリートでもない。路肩に間隔も形も正しく十餘米置き位に半立方米程の小粒の碎石が配置されてゐるから、きつと水締マカダム鋪裝でよもあらうか。相當入念な施工らしく横斷曲線もきちんと定規が通つてゐる。君も既に氣附いたであらうが、此の道路こそ蔣介石が命の綱と頼み、此れあるが爲めに長期抗戰を豪語し、絶對の依存を置いてゐた所謂援蔣ルートである。佛印諒山から鎮南關を越え、南寧賓陽を経て柳州へ通じてゐる最大唯一の道路である。流石に立派なもので、僕が渡支以來始めて發見した道らしい道であり、二ヶ年半に互つて北支から中支、南支を駆け廻つた末、探がし當てた掘り出し物である。

僕は此の道路を見詰めながら嬉しくなつた。我等の同志、見失つた友に遭遇したやうに懐しい氣がし、支那にも道があつたのだと云ふ安堵に似たものを覺えた。又此の道路を設計し施工した男の技術者としての満足はさこそと察しられ、何となく羨ましくさへなつた。

我等の自動車は快適なスピードで、ぐん／＼走つた。砂塵が物凄いで目も口も開けられず、普段お喋りの兵隊も黙つてゐる多きは居眠りしてゐるやうである。

僕は地圖と對照しながら附近の狀況を見物した。此の邊りは高原地であつて、高原地特有の大きく緩やかな起伏が續いてゐる。地勢は割に平凡であるから路線選定には大して骨も折れず、従つて良好な道路設計が出来たのだとも言へる。

立橋も餘り無く、廣々と眺望が利く。なだらかな芝地には水牛が三々伍々、長閑かに徨よつてゐる。土地の低い所を利用した自然の水田もかなりある。面白いことには其の水田の稻が所によつてまち／＼である。種子を蒔いたばかりの稻苗もあれば、青々と長く伸びたのもあり、穂がすつかり色附いて垂るんでゐるものもある。何故であるか、戰爭とか天候とか水利の便とか種々の原因が考へられるけれど、結局は支那人の悠長で出鱈目な生活に起因するのだからうか。何しろ年に三回も收穫があるので、若し日本のやうな改良増産が計られたら大したものであらう。

部落には相當澤山の地方民がゐた。占領直後であるのに早くも戻つて来たものらしい。特に小孩子が多く、路傍へ出て「タバコく〜！」と手を差し出してゐる。暑氣と砂塵とに參つた兵隊は誰も相手にせぬ。

十七時頃、山墟と云ふ部落を通過した。

先頭の方から「食事をするやうに」と遞傳が來たので、乾パンを取り出して嚙つて見たが、咽喉に固へて喰べられない。水筒の底に残つてゐた僅かな水も煮湯と化して咽喉が潤はないし、砂塵と一緒にではパンだか泥だか味も分らない。それでも皆黙々と嚙つてゐる。

西方から來た自動貨車の隊列と行き違つた。其の中に負傷兵らしい者が寢てをり、白い繻帯が妙に氣になつた。轆で、「敵襲警戒！ 鐵兜を着けよ！」

と命令が傳はつて來た。僕は輕機の乗つてゐる自動貨車〇臺を自隊の先頭に立つやう手配した。居眠りしてゐた兵隊も皆緊張して、夫々銃を執り直し警戒の眼を光らした。

其の頃から道が次第に悪くなつた。矢張り敵がやつた破壊である。

南寧奪回の夢が破れたばかりでなく、賓陽作戰で徹底的な殲滅に遇つた結果、遂に此のルートも諦めるに至り、今度は逆に皇軍の利用を阻止しやうと破壊したものである。曾ては命の綱とまで

頼んだ此の道路を此んなにまでしないであらなかつた彼等の恐怖心が思ひ遣られて哀れである。賓陽作戰後の僅かな期間であつたので、欽寧公路程の破壊は到底出来なかつたらしいが、それでも要所々々をよく選んで相當徹底した防禦を講じてゐる。道幅が廣いので戦車壕も大きくて深い。橋梁は全部掃滅的な爆破であり、鹿砦まで幾ヶ所か造られてある。流石立派な道路もひどく慘なな姿になつてしまひ、所によつては昔日の面影も止めてゐない。

此れでは容易に修復出来ないの、我軍は止むなく阻絶部を避けて、假道を造つてゐる。自動貨車は谷に下つたり、丘を廻つたり、水田の埋立てを辿つたりするので、速度が出ない。僕は車上から戦車壕の切口を覗いて見たら、鋪裝断面が恰度模型のやうにはつきりと分つた。粘粘土の地盤の上に道路幅より狭く、厚さ二十厘位の黒みがかつた基層がある。碎石層ではなく砂交りの土壌のやうだ。表層は厚さ三、四厘位の白い碎石層で、案外薄いが堅く密着して一枚の板のやうである。膠着材は使つてゐないやうに見える。如何にも烏口で割いたやうに各層がくつきりと規則的に出來てゐて、巧みな撤布と念入りな輾壓が施されたことが推定される。

感心して覗てゐたら、自動貨車は破損橋梁を迂迴する所に差し掛つて、全員下車を命ぜられた。水野部隊長から、「北方に對し直ちに警戒配置せよ。」

と傳令が來た。先刻行き違つた自動車隊が此處で敵襲を受けて  
○名の犠牲者を出したとのことである。直ぐに警戒と自動車隊援  
助との部署をする。自動車隊は深い溪谷へ下つて危険な丸太橋を  
渡り、對岸の崖を匍ひ上るのである。綱を付けて曳いたり、後押  
ししたりして、一臺々々を渡してやる。次第に黃昏れて足元が危  
ない。

破損橋梁は徑間二十米ばかりのロートラスであつたのが無慙に歪  
んで斜めに落ち込んでゐる。田舎の公路に近代的恒久橋の架つて  
ゐるのも出征以來始めて拜見したものである。部材が割に細く組  
立てが複雑であるけれどワーレン型らしい。

自動車隊を全部渡河した頃は眞暗になり、それからは暗夜の  
行進である。道は益々悪くなるじ、暗さは暗し危険此の上もない  
幾度か戦車壕に落ちさうになつたり、鹿砦に突き當りかけた  
破損橋の橋礎の縁で急停車したり、散々膽を冷やす。動搖が激し  
いので抛り出されんやうに、お互に掴み合つてゐる。濛々と立ち  
籠める砂塵はヘッドライトを遮つて前の自動車さへはつきりせ  
ぬ。車體の後ろに書かれてある日章旗のマークが時折僅かに見え  
る位で、運轉手に聞けば、唯勘一つでハンドルを動かすのだ、と  
言ふ。それよりも、前の自動車に乗つてゐる桶見軍曹がしつか  
り胸に抱いてゐるところの藤澤上等兵の遺骨の白い包みの方がヘッ  
ドライトに浮んで傷ましく思はれる。

綾津縣城と書かれた門の前を通つたことゝ西郷と云ふ部落を抜  
けたことを覚えてゐる。地圖から想像して、僕等の前進先きはま  
だ／＼遠いものと決め込んでゐたら、突然夜の二十時半頃、自動  
車隊の群列が全部停車してしまつた。僕が水野部隊長に呼ばれ  
て、先頭へ出て行つたら、其處には先發で青村部隊本部と連絡し  
命令を受領して戻つた鈴木副官もゐて、部隊長から

「我が部隊は前進の途中、道路補修を爲すべく命ぜられた。擔任  
區域は此の上屯墟から那芒村迄で、此れを三日間で完成すること  
になつた。三崎隊は此處から七籽を、貴隊はその前方七籽那芒村  
までを實施して貰ひたい。」

と云つた命令である。おや／＼と驚く。餘りにも唐突な道路補  
修の命令である。聊か慌てゝしまふ。ゆつくり落着いて考へねば  
見當も附かぬ。參戰二年半、想像もしなかつたことであり、如  
何に内地では道路技師であつても、戦争用の道路に就ては素人で  
ある。と云つても自分の知識は出来るだけ役立てたいし、あれや  
これやと頭が亂れる。第一其の氣になるまで方針も構はず、計畫  
も出来ない。

鈴木副官から大體の状況を聴き、三崎隊とも別れて、我隊だけ  
前進約十籽、成程此の邊は特に破壊が酷いなア、と思ひつゝ夜  
も更けた二十一時過ぎ、此の板利墟に到着した。

一先づ此處で居を構へやうと自動車隊を下りたが、さつぱり様

子が分らない。取り敢へず部落を點檢したら、貧弱な汚ない家ばかりが數軒あつて、部落民もかなりゐる。幸に敗殘兵や木穩分子と云つた者はゐないやうだが、到底宿營など出来る所でない。それで露營と決めて手配する。警戒配置は言はずもなである。厄介になつた自動車隊はその夜の中に尙北江まで行くのだとて去る。兵隊は直ぐにごろ／＼と瘧ころぶ。砂塵を拂ふ元氣もなささうだ。僕も大きな榕樹の下に疲れ切つた身體を投げ出す。そして道路補修のことを考へる。

空は曇はつてゐるのか星一つ見えない。蚊だけがぶん／＼唸つてゐる。防蚊面を被つたら頭や顔に附いてゐた埃が面の中に籠つて何時迄も呼吸に絡らむ。汗に濡れた襦袢が肌に冷たい。二十三時頃、鈴木副官がやつて來た。

「疲れたらうが、今夜直ぐに作業を開始して貰ひたい、と部隊長が言つてゐる。これから擔任區域と地形とを一應案内しやう。」と言ふ。

朝暗い内に出發して十數時間、自動車で揺られ続け、すつかり疲労困憊、僕自身が身體さへ動かせぬ程である。どうして可愛い兵隊に、「夜間作業をやれ」と言ひ得やうか。

通信班の所へ「まだ通じないか」と訊かせたら「今通じたところだ」との答。早速電話機の所へ匍つて行つて部隊長に掛ける。御命令の日迄に必ず完成しますから、今夜だけは全員を休ませ

て頂きたいです。」

とお願ひする。勿論自分では意見具申の積りである。

「部隊命令であるから實行して貰ひたい。豫定は三日間としてゐるが、少しも早く完成せねばならんのだ。三騎隊は既に出てゐるぞ。」

「命令ですか、副官の言葉を御希望のやうに解したものですから失禮しました。今から直ちに實施します。」

と云つた工合で、夜間作業に出ることになつた。直ぐ各隊長を集合させて協議する。作業方針に確信もなかつたが、そんな事は言つてゐられず、兎に角戦車隊を出来るだけ埋めることゝ定めてそのやうに命令する。

命令とあれば絶對である。何も言ふところない。零時頃から鈴木副官も共に作業隊を連れて廻り、夫々指示を與へて着手させる急ぎ準備した僅かなカンテラの照明では漸く手元が分る位である。唯々として素直に働く兵隊の何と可憐なことか。身動きも出来ない程疲れてゐたのに、いざ任務となれば忽ち斬らしい意氣と闘志に燃え上つて奮勵する。其處には最早や疲労も逡巡もない。壕に溜つた水を汲み出す者、畚を擔ぐ者、地均しする者、皆一つになつて、少しの齟齬も停滯もない。恐ろしい力だ。自分で指揮してゐてさへ、何となく壓迫を感じる。

新しくして、作業を敢行、夜が明けてからも、其の又次の日も。

次の日も、晝夜連続である。縦ひ一部宛交代で作業場附近に寝させたとは謂へ、殆んど不眠不休に等しい努力を盡くし、遂に戦車壕十二ヶ所の埋込みと、大小五つの橋梁修理をやり遂げたのである。

今日僕が次期擔任區の偵察に派洞村附近へ行つた留守中に、水野部隊長が巡回されて、「作業が早急且つ良好に完成した。」と褒めて下さつたさうだ。御蔭で今夜は安心して、ゆつくり眠れる。有り難い事だ。特に兵隊の爲めに喜んでやりたい。今頃はもう死んだやうに眠つてゐるであらう。

此處へ来た翌日「せめて隊長だけは」と云つて部落中でも一番良い家を開けさせて、僕の部屋を造つてくれたが、満足に此處で寝たこともなかつた。それが最後の今夜になつて漸く我が部屋で蚊帳を吊り、敷き藁の寢床に臥ることが出来る。

然し久しぶりで書き出した此の手紙が餘り長くなつて、既に夜も更けてしまつた。此れでは渴望の睡眠も時間が無いことになる急いで終ることにしやう。

思へば不思議な廻り合せである。前方に我等本來の任務が待つてゐるのに、此うした道路補修を僕が擔任することになつたとは。面白い事である。戦地の道路は始めてだが、何と云つても出征前の本業である。何となく故郷へ歸つたやうな懐しさがある。當分は道路補修を續けるらしい。嬉しい氣がする。大いに働かう。

明朝は早く出發して約四十七軒前進せねばならぬ。其の派洞村には大任が待つてゐる。當分は又忙がしくなり、何時後便が書けることか分らない。

和歌山や札幌へもすつかり無沙汰してゐる。例に依つて此の手紙を回覽にしてくれ。

殆んどの將兵が一回以上もマラリヤにやられてゐるのに、僕は不思議に罹らず、至つて元氣で明朝である。安心してくれ。

七月〇〇日

X X X

武男君、

實に暑い話にならぬ。空飛ぶ鳥が落ちて來ないのが不思議だ。北支で毛皮の防寒具にくるまつてゐた當時が變に思ひ出される。

唯慰められることは、此の邊の水が綺麗なことよ、景色の良いことだ。支那の水は悪いものと決めてゐたのに、此の方面へ入つてから始めて内地のやうな清水を見た。我々は限りなく貪り飲む冷たくて甘い。但し石灰分を含むとかで、下痢する者が多い。成る程湯に沸かすと白い沈殿物がある。それでも滾々と湧く岩清水を見ては我慢が出來ない。

水の綺麗な所は景色が良いものと決まつてゐるらしく、清水にふさはしいやうな岩山、それも此の邊獨特な相貌を呈した奇岩怪石が至る所に屹立してゐる。日本の床の間に掛る風雅な墨繪雨畫

と云ふのは此處が發祥地ださうな。道理であの棚曳く雲の上に突元として時つ巨人のやうな巖峯は如何にも南畫である。然も構圖の大きいことは耶馬溪を幾十倍、幾百倍かした程である。其の岩肌が日光に映えて紫に輝き、青々とした松や蔓草が點々と絡らんである有様など、勇壯にして偉大、優美にして清冽、正に入神の技巧である。時折襲ふスコールがその峯々を傳つて洗ひ清めて行く壯觀、其の後の絶妙な秀色、羽毛で撫でたやうな薄霞、輝娟と懸る瀧、浮き出す寧明の塔、綠濃い森、群れ集ふ水牛、等々總てはその儘畫繪である。

うつかり眺めてみると、何時か夢幻の世界に誘はれて、戦争も忘れさうだ。若し此處で悠々自適と云つた生活が出来るものなら、誰しも南畫を描きたくなるに違ひない。そして師もなくて知らず／＼の内に立派な畫家になるであらう。それ程風光明媚であり、恍惚と見蕩れるけれど長らく戰場に擦れ切つた頭では、満足な形容詞さへ浮ばぬ。實の所今の僕には景色を觀賞するだけの心に餘裕がない。四六時中連續の作業で血眼である。あれからデーツと道普請をやつてゐる。

派洞村では寧明迄約三十料の長區間を擔任し、中間の那關村、棟鄭村、明江街、扇美村などと云つた所に兵隊を分散させて、相當大量な仕事を敢行した。僕は毎日、乗馬か自動貨車で全區間を走り廻つた。傳令一人だけ連れて歩くので何時何處から敵の狙撃

を受けるか分らず危険であつたが、作業人員を減らしたくないので、自分の警戒兵を置かなかつた。擔任區間を一回りする、それだけでへと／＼に疲れてしまつた。晝は暑いので成るべく休ませ、主に夜間作業を選んだので、夜通し歩き廻ることもあつた。そんな關係で僕は何時何處で寢るとも、何時起きるとも全然決まらない。橋の下に眠ることもあれば馬上で眠ることもある。寸暇を得れば何處でも構はず直ぐに眠る。前にも書いた通り、「戦争とは眠きものなり」で實に眠い。兵隊も亦作業間の僅かな休憩に直ぐ眠る。……それは兎に角。

僕等が派洞村に居る間に國境作戦が終り、引續いて佛印作戦が企圖された。今度は相當大規模なものらしい。第一線部隊は既に着々と準備を進めてゐるらしく、輸送は日々に激増し、自動車隊の往復が激しくなる。どうしても一臺でも樂に、少しでも早く走らせねばならぬ。それに作戦開始までに作業を完成して、我々も第一線に出なければならぬ。部隊長からは幾回となく作業進捗を急ぎ立てられる。

ところが戦車壕は深くて仲々埋まらぬ。溜つてゐる水を汲み出すだけにかかりの時間を要する。鹿砦は頑強で容易に撤去出来ない。橋梁は材料を搬出するだけでも大變な骨折りである。それに反して狩り集める地元民工は至つて少ないし、百數十度と云ふ亞熱帯の直射日光は骨の髓まで燻かすやうだ。頭が茫乎となつて來

る。

それでも兵隊は枚々營々、倦まず弛まず奮闘を續ける。眞裸の皮膚は黒々と焦げて、汗に光つてゐる。作業中に倒れる者が時々ある。谷の水を汲んで打ち掛けてやり、「馬鹿野郎!!」と呷鳴りつける。慘酷なやうであるが、叱ることが時には最適の清涼劑であつて、兵隊は又むく／＼と起き上つて働く。任務に邁進中の兵隊には慰めは不必要らしい。氣憤が崩れるからだ。中にはマラリヤ熱を冒して出勤してゐる者もあるし、血に滲んだ繃帯の儘十字鍬を振る者もあり、破片彈を體内に残してゐる者さへある。

實に涙ぐましい情景であり、傷々しい心情である。實に恐ろしい士氣であり、不思議な働きである。何とも理解出来ぬ旺盛さであり、強靱さである。一體此んな力が何處に潜み、何處から湧くのであらうか。

何時も考へることであり、僕は僕なりに理窟つけてはゐるが、理窟など既に問題でなく、事實は事實だけで譬へやうもなく尊い死んでゐる筈の兵隊が機關銃を撃つたり、片肺の飛行機が無事に長つたり、野地では當り前のやうに奇蹟が繰り返へされてをり我々の隊にも拾ひ上げれば幾つもさうした奇蹟はあるが、そんな奇蹟より却つて此うした所に本當の魂の輝き、崇高さがあるのでなからうか。僕は其處に神々しいものを感じて、何時も胸打たれぬ。(へん)。ぬ。

○若葉吟社詠草

蝶飛ぶや檜の柳に酒肆の旗	野狐禪
讀み呆けし蒨に闇の梅早し	同
餅茶屋の晴を鶯鳴きにけり	農鳥
かさなれる眞奥の山や雪残る	同
施肥晴や畑打つ娘逞しく	同
残雪の曠野晴れたり銃の音	同
木の芽吹く風少しあり丘晴るゝ	落邨
山に臨む樓曠れやかに木の芽風	同
屋根草を大空に消えつ胡蝶哉	翠山
姉と來て草餅食ひぬ乳母が家	同
縁日南蝶飛び來ぬれ垣隣	淺茅
大らかに木の芽大氣を吸ひにけり	同
種蒔の土に馴染める素足かな	如水
雨あがりの心和めり春の闇	靜如
春の濱何を語るや日向ぼこ	正一